

## 1. 調査研究のテーマ、概要

調査研究のテーマ	授業実践を土台とした人権教育の推進 ～児童・生徒と教職員が一緒に考え 実践していく人権教育～
----------	--

### ○調査研究のテーマを設定した目的

令和4年度と令和5年度に「人権教育総合推進地域事業」を受託し、人権教育の授業実践に力を入れてきた。特に国立ハンセン病資料館やハンセン病回復者の方のご協力をいただきハンセン病問題の授業実践に力を入れて推進してきた。教職員が人権課題について学び、自分自身の人権意識を再確認することができた。また、まだ知らない事実があることを知り、子どもたちと一緒に学びたいという思いをもつことができ、その思いが授業実践につながっていった。

各校の人権教育担当教員が参加する人権教育総合推進会議において、様々な人権課題を学び、授業作りを行っていったことは、各学校の人権教育推進の大きな土台を作ることができたと感じている。年間6回の会議を通して、人権教育担当教員の意識が高まっていくのを感じることができたのは、大きな成果である。

また、各学校で実践した授業の中で、子どもたちが、「知らなかった。」「もっと学んでたくさんの人に伝えたい。」「学校の授業で勉強したから、ニュースで話題になっていた時に語れた。」など、多くの感想を書いた。心を動かされたり、考え続けたりする学びの姿を見ることができたことも大きな成果であった。

この学びを止めることなく、さらに、様々な人権課題に触れ、自分が知らない世界を知り、相手のことを思う想像力を身に付けてほしいと願う。

まだ知らないことを進んで学ぶこと、様々な人に出会って感じる、体験すること等を通して教職員と子どもと一緒に学ぶ人権教育を推進していきたい。

### ○調査研究の概要

年度当初と終わりに、教職員と児童・生徒へのアンケート調査を実施し、実態に応じた人権教育の推進を行っていききたい。また、授業での問いかけや授業形態などが、理解につながっているのかを検証する。

人権教育総合推進会議では、これまで人権教育に関する実践の報告を行い、市内の全ての学校に普及できるように努めてきたが、さらに今日的な課題を含めた人権教育をテーマとした研修会を実施する。令和4年度から取り組む「ハンセン病患者等」をテーマとした研修会や学習会で培った授業作りのポイント等を土台として、子供や外国人、新たに同和問題について取り組む。

## 2. 基本情報

### 推進地域の概要

○都道府県名及び市町村名

神奈川県

○推進地域名

三浦市

○推進地域市区町村教育委員会名

三浦市教育委員会

○これまでの研究指定等の状況

平成 27、28、29 年度及び令和 4、5 年度

### 推進協力校の概要

○学校名

三浦市立南下浦小学校

○学級数

9 学級（うち特別支援学級 3 学級）

○児童生徒数（名）

在籍児童数 87 人

○学校名

三浦市立上宮田小学校

○学級数

9 学級（うち特別支援学級 2 学級）

○児童生徒数（名）

在籍児童数 217 人

○学校名

三浦市立旭小学校

○学級数

8 学級（うち特別支援学級 2 学級）

○児童生徒数（名）

在籍児童数 138 人

○学校名

三浦市立剣崎小学校

○学級数

5 学級

○児童生徒数（名）

在籍児童数 57 人

○学校名

三浦市立南下浦中学校

○学級数

13 学級（うち特別支援学級 4 学級）

○児童生徒数（名）

在籍生徒数 319 人

○指定理由

令和4年度、南下浦地区の学校が推進協力校として培った実践力を生かし、新しいテーマに挑戦できる学校が多いため、推進協力校としたい。南下浦地区の実践を三崎地区と初声地区に広げ、それぞれの地区の異なる発想を掛け合わせることで、新たな人権教育の視点に気付くことができると考える。

### 3. 取り組んだ人権課題について

取り組んだ人権課題（該当するものに○印。複数選択可。うち、最も主要な人権課題1つに◎をつけること。）※人権教育研究推進事業公募要領（別紙）「2. 事業の内容」を必ず確認すること。

①子供	○
②女性	
③高齢者	
④障害者	○
⑤同和問題	○
⑥アイヌの人々	
⑦外国人	○
⑧- 1 HIV 感染者等	
⑧- 2 <u>ハンセン病患者等</u>	◎
⑨刑を終えて出所した人	
⑩犯罪被害者等	
⑪インターネットによる人権侵害	
⑫北朝鮮当局による拉致問題等	
⑬性的指向、性自認	○
⑭その他（            ）	

## 4. 調査研究の内容等

### ○調査研究の内容

#### 【三浦市教育委員会】

・「ハンセン病患者等」については、令和4、5年度の実践をもとに、児童・生徒の発達や実態に応じた授業作りを継続していきたい。令和6年度は、国立ハンセン病資料館やハンセン病回復者の方を学校に招くことで、様々な人との出会いを通じた実践を行う。

・「外国人」については、これまで校内研修等で教職員が中心となり学んできた。三浦市にもたくさん外国の方がいて、働いたり生活したりしていることを知った。自分たちの大切な故郷を外国の方も一緒に支えていることを知っていくような授業実践を行う。

・「同和問題」については、授業化することが大変難しい課題であると感じている。令和4年度から行ったハンセン病についての授業作りを生かして、まずは、同和問題を教職員が学び、子どもたちにどのように伝えていくことができるかを考えていくようにする。

#### 【神奈川県教育委員会】

・人権教育の推進において指導的な立場にある教職員の資質と指導力の向上を図る。

・教職員が人権教育について理解をし、各学校の実態や児童・生徒の発達の段階をふまえた人権教育を推進できるよう、個別の人権課題をテーマとした講演や人権感覚を磨く参加体験型研修等、人権教育研修会を実施する。

・各学校に教職員向け・社会教育向け啓発資料や児童・生徒向け学習教材の配付、国や県の動向や新しい人権課題についての情報提供を行う。

・推進地域における人権教育の研究の深化に資することを目的とし、県教育委員会、市教育委員会、推進地域教職員が人権教育の効果的な推進について協議する。

### ○実施方法

・「ハンセン病患者等」では令和4年、5年度の実践を基にハンセン病資料館と連携し、児童・生徒の発達や実態に応じた授業実践を目標にした。小学校では道徳の教科書を使用した実践が浸透した。中学校ではこれまで独自の教材を使用した実践をすすめてきた。更に令和7年度使用予定の道徳教科書を用いた実践も行い、ハンセン病問題の歴史理解が深められたことで療養所を出ることができなかった回復者の気持ちを考えることができた。

・「同和問題」の講演会に推進協力校の教職員と人権教育担当者が参加し、同和問題の課題を理解できるようにした。同和地区を理由として差別的な扱いを受けた当事者の話を聞いて、「同世代の方が今も同和問題で苦しんでいることを知り、考えていかなければならない課題だと分かった。」という教職員の感想があった。今後は、児童・生徒とともに考える授業作りに力をいれていきたい。

・「外国人」については、神奈川県には外国籍の方や外国人の方が多く住んでいるという

現状を知った。南下浦中学校で行った「総合的な学習の時間」の授業では、三浦市では外国籍の方と触れ合うことは少ないが、神奈川県には多くの国々の方が住んでいることを知り、驚いていた。文化の違いをどのように受け入れていくのかを考え、互いの国のことを知っていくことが大切だと気付くことができた。

・上宮田小学校の人権コーナーでは様々な国の食べ物を紹介した。見慣れない料理に対して「気持ちが悪い」という児童がいたが、他国の文化の違い等を継続して紹介していくことで、違いを受け入れていくことや知らなかったことを知る経験をすることができ、児童が興味をもちながら文化の違いを受容する様子がみられるようになった。また、南下浦小学校の人権コーナーには、展示のほか書籍等も置き、児童がいつでも触れられる工夫をした。掲示物や書籍に興味をもち、立ち止まってみたり書籍を借りたりする児童が多くいた。

・「子ども」については、自分自身がかけがえのない存在であること、今一生懸命に生きていることのすばらしさを子どもたちに伝えるようにした。南下浦小学校や剣崎小学校では、教職員の日々の言葉掛けや授業だけではなく、外部講師を招き講演を行うことで、病気があっても生き生きと過ごす姿や自分が誕生するまでの過程、家族の愛などを感じることができた。

・「性的指向、性自認」については、南下浦中学校3年生道德の時間で外部講師を招き、性的指向、性自認をめぐる現状と課題について理解を深めることができた。

・「障害者」については、剣崎小学校全校児童・保護者を対象に人権講演会を開催した。外部講師を招き、当事者の体験から障害者をめぐる現状と課題について知り、理解を深めることができた。

・総合推進会議や校内研修において、他校の実践を知り市内に実践を広げることができた。「〇〇学校がやっているように、研究全体会の最後に人権研修を行い、様々な人権課題に触れられた。」「人権週間の時に、ワークシート集を利用した授業を授業参観で行うよう担当者として提案し、実現できた。保護者にも人権教育を体感してもらえた。」「来年度は、もっと深まるように新たな取組をしたい。」など、各校の実践を共有することで、それぞれの学校に合った形の人権教育推進を行えるようになってきた。人権担当者の人権感覚の高まりがみられた。

## 5. 検証・評価・改善・普及

・ハンセン病問題の授業実践については、児童・生徒がハンセン病の正しい知識を得るためには、1単位時間では収まらないことが分かってきた。複数回で計画的に正しい知識を得ることで、ハンセン病に関わる人権問題について、自分の考えを述べたり、意見を聞いたりすることができた。小学校の実践から中学校の実践につながり、ハンセン病のことを知っている児童・生徒が増えてきた。また、地域でも「三浦市ではハンセン病問題の授業を行っている。」ということが少しずつ知られるようになり、地域の方が、ハンセン病に関わりのある方を紹介してくれることもあった。

・「同和問題」については依然として、「授業にしていくのは難しい。」「子どもにどのように伝えたらよいかわからない。」「自分自身が同和問題を理解していない。」という思いを持っている教職員も少なくない。講演会での当事者の話で、今もなお差別が続いており、苦しんでいる人がいること、決して同和問題は終わった課題ではないことを理解することができた。同和問題を身近な課題としてとらえることができたことは、成果である。今後は児童・生徒へどのように教育するか模索したい。

・人権コーナーの設置や職員室での資料の共有など、児童・生徒や教職員が気軽に人権課題に触れられる工夫をしようと投げかけ、取り組んだ。写真や書籍、詩、子どもの考えなどを掲示し人権についていつでも考えられる環境を整えることができた。ピンクシャツデーの取組を人権コーナーで呼びかけた学校では、児童だけではなく教職員も定期的にピンクのシャツを着用する回数が増えていき、全校で人権に向き合うことができるようになってきた。

・ボッチャ体験、車いす体験など、スポーツ推進委員や社会福祉協議会を始めとする地域の方の協力を得ながら授業を行った学校が多くあった。体験を通して、仲間と関わるよさを感じたり、地域の方が子どもたちの学ぶ姿を応援してくださる姿をみたりすることができた。地域のつながりを大切にした各学校の人権教育の土台が強くなってきていると感じる。

・「令和6年度三浦市学校教育全体構想に係る児童・生徒アンケート」と児童・生徒の授業後の感想等から読み取れた、3側面ごとの変容は次のとおりである。

### 【知識的側面】

・ハンセン病患者等の人権課題について、「家族と離れて生活しなければならない苦痛を知った。」「隔離政策が終わっても、差別が続いている恐ろしさを感じた。」「療養所から家に帰らなかった人は、人の目、家族のことを考えて、帰りたくても帰れなかったのかもしれない。」「家に帰れなかったのは、そういう社会だったから。周りの人が違っていたら変わっていた。」「雰囲気を作っているのは、人間。社会の空気をそう簡単には変えられないのだと思った。」「自分の人生だから、自分だったら、療養所を出て家に帰りたい。」など、

各自が深く考える姿があり、ハンセン病患者等の人権課題への理解が深まった。

・車いす利用者の方の話や海外での体験談を聞くことで、新たな視点をもつことができた。車いす利用者がみんな足が悪いわけではないこと、障がいがあってもスポーツや自分のやりたいことに挑戦をして生きていること、ねずみを食べる国があるが、タンパク源として生きるためには必要なことなど、それぞれの生き方を知り、思い込みだけではなく深く相手を知っていくことの大切さを感じた。

**【価値・態度的側面】**

質問項目「自分には、よいところがあると思いますか。」

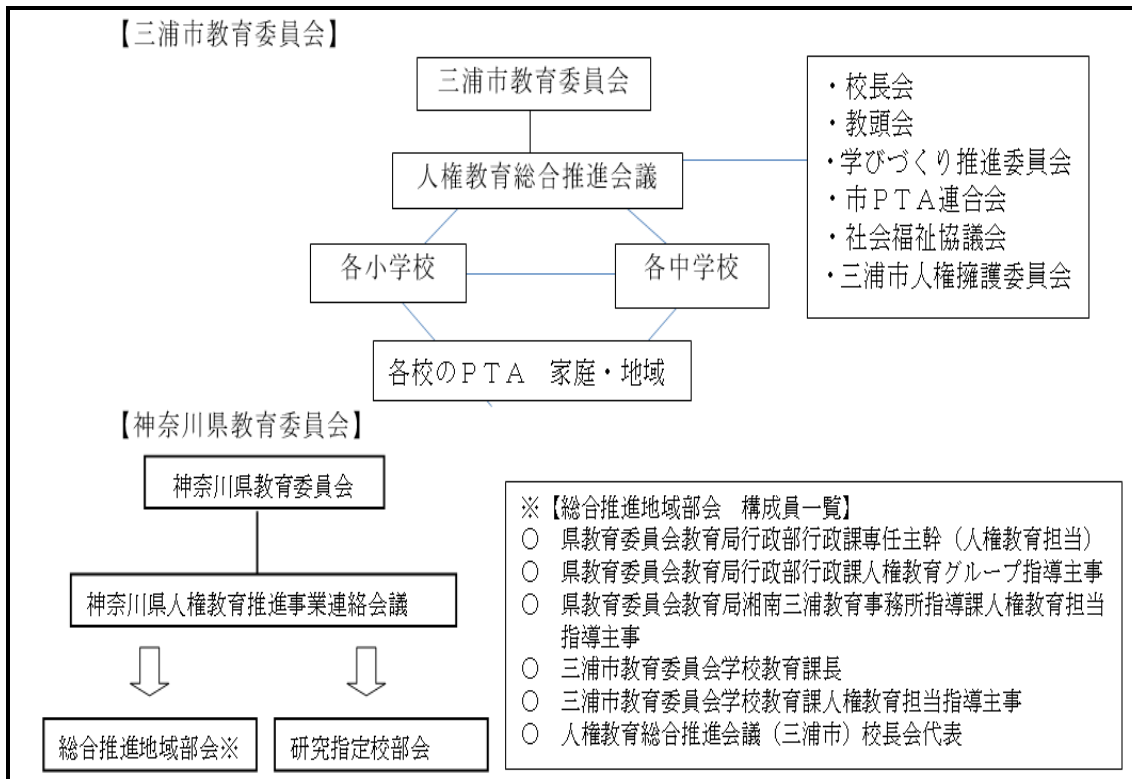
・クラスの課題を話し合ったり、友達との関係を考えたりする取組を行ったことにより、全体的に肯定的な回答が多く、小中ともに80%以上であった。関連した質問での回答で将来自分でやってみたいことや夢がある児童・生徒が多く、希望をもって生活する基盤ができていると感じる。

**【技能的側面】**

質問項目「問題の解決に向けて、自分で考え、進んで取り組むことができましたか。」

・小学校での回答が6%、中学校での回答が9%向上した。講義型の授業だけではなく、児童・生徒が自ら課題を発見し、考える時間を大切にしている結果であると感じる。

## 6. 推進体制（都道府県・指定都市教育委員会を含む）



○関連資料

【三浦市】

<人権コーナー>



<ピンクシャツデー>

